

『死の舞踏』—中世末期から現代まで—(西洋史例会)

11月25日開催

「死の舞踏」とは何か—壁画から映画まで—

博士後期課程一年 岡田 尚文

一九二九年、ウォルト・ディズニーは短編映画『骸骨の踊り(スケルトン・ダンス)』を製作した。サンサーンス作曲の『死の舞踏』に骸骨がコミカルに踊る映像を組み合わせたもので、トーキー登場後、初めて本格的な背景音楽を導入した映画でもあった。つまり「死の舞踏」=「ダンス・マカーブル(Danse Macabre)」という主題は、二〇世紀に入ってからもマスメディアの最先端に存在していた。

一五世紀の「死の舞踏」図は、「3人の生者と3人の死者の図」と呼ばれる一三世紀の意匠から一つの特徴を受け継いだ。死んだ自分に出会う、という構図である。老いも若きも、男も女も、坊主も俗人も、金持ちも貧乏も…、皆「死者」としての自分にいざなわれてマカブレのダンスを踊る。一説には、「死の舞踏」は演劇として、宮廷や町の辻々で演じられるような非常にポピュラーなものだった。それが壁画、ひいては木版画などに表わされるようになるというわけだ。とりわけ、パリのイノッサン墓地の回廊壁画が、最も古くかつ影響力も強かったようである。一五世紀末にはこれが木版本挿絵に写されて大変な評判を呼び、「死の舞踏」図は西ヨーロッパ全土に広がっていく。

中世の秋には、「死」は非常に具体的・肉体的なものであった。ペストの流行や戦乱によって、その辺に死体がごろごろしているような時代だったのだ。初期の「死の舞踏」はだから、腐った肉のまわりついた「死者」の舞踏であった。「死」のイメージは、時を経るごとに「死者」そのものから離れ、抽象の度合いを深めた。どこか観念的な「骸骨」の踊りが登場する所以である。変化の兆しは16世紀半ば、例えばホルバインの作品などに見られる。しかし、そのような変容を遂げながらも、「死の舞踏」図は現代にまで普及した。この度、国立西洋美術館で「死の舞踏」展が開催されたことそれ自

体が、既に多くを物語っているのだ。

かつての演劇や壁画、木版本は現代のマスメディアに相当する。最近のホラー映画を中心とするいくつかの映像・音楽を最後にご紹介したが、今報告を通じて「死の舞踏」がいつの時代にも最先端の表現媒体と結びついていたことをご理解いただけたとしたら幸いである。

さて、二一世紀の「死の舞踏」はどのように踊られるであろうか。